



「そなたが仙田殿の孫の直紀殿であるか」

(直紀殿って……)

ぶっとふき出しかけたのを、ギリギリで呑み込んだ。

まなざしが、真剣だったからだ。

ぼくが子どもだから、わざと時代劇みたいな話し方をしているのだろうと思っていただけ、そうではないらしい。

「直紀殿は幼き頃よりピアノや剣道をたしなんでいると、先ほど仙田殿よりうかがったばかりじゃ。文武両道の自慢の孫であると申しておられたぞ」

「いえ、それほどでも……」

ちらっと見ると、おじいちゃんは照れくさそうに白髪頭をかいている。

(つたく、おじいちゃんってば！)

「わしも剣を少々たしなむのだが、直紀殿の団体戦でのお役目は？」

「……次鋒です」

剣道の団体戦は、先鋒、次鋒、中堅、副将、大将の五人で闘う。

「次鋒とは、流れを引き寄せねばならん重要なお役目であるな。して、直紀殿は強いのか？」
「ものすごく強くはないけど、弱くもないと思います。……でもぼく、勝つためだけにやって

18、最後の名乗り

のが見えた。

その日、杜乃武将隊は夕方から仙台市郊外のイベントに出陣することになっていた。ぼくはひと足先に、車で本陣に帰されることになった。まだおもてなしを続けている政宗さまをはじめ杜乃武将隊のみんなを横目に、一人だけ先に帰るのは、本音を言えば残念だった。

でも、おもてなしは遊びじゃない。お役目だから、仕方がないことなんだ。

「直太くん、おつかれさまでした。最後までバタバタで申し訳ありません」

ぼくを降ろすと、山部さんは急いでお城に戻って行った。

「ありがとうございます！」

走り去る車に礼をして、顔を上げた、そのときだ。すぐ近くに、おばあさんの姿があることに気づいた。杖をつき、ひと足ひと足、足元を確かめながら歩いてくる。足元に気をとられて、ぼくにはまったく気づいていないようだ。

（どうしよう。このまま鉢合わせしたら、びっくりさせてしまう）

「……こんにちは」

驚かさないように、できるだけ丁寧^{ていねい}に声をかけてみた。

顔を上げたおばあさんは、「ありやりや」と目をむいた。が、すぐに笑顔^{えがお}になって「こん

